

技術をつなぎ、人を育てる

宮堂 頌也（のぶただ）さん

「支えてくれる人たちがいたからこそ、最後まで全力で取り組めました」日本人で初めて、第48回技能五輪国際大会の「付加製造」職種で銀メダルを獲得した、㈱豊田自動織機の宮堂頌也さん。ものづくりの原点は、幼い頃に夢中になったレゴ®ブロック。自分のアイデアを形にすることが好きで、設計者の父親に憧れ同社に入社。ものづくりを追求するため、技能五輪を目指します。

付加製造とは、3Dプリンターを使って立体物をつくる技術です。今大会の課題はロボット部品の製作。強度と軽さを両立させる加減を見極め、最適な形状を設計する技能を競います。4日間にわたり、設計・製作・検証までを一人で行うため、幅広い知識や発想力も欠かせません。

大会までの9カ月間、立ち止まることも多かったといいます。課題では具体的な数値は指示されません。最適な形状という正解を自分で探し出す問いに、迷いながら検証と改善を繰り返します。経験が生む感覚や判断は図面にはなく、熟練技能者のもとで教えを請うなど、限られた時間で自らの可能性を広げます。

「ものづくりは人づくり」。技能五輪は、選手個人が技能を競う舞台であると同時に、技術や経験を継承する機会でもあります。若手の挑戦を職場全体で支え、同じ目標を追い駆ける一体感が、苦しい練習に向き合う力になったと話します。

迎えた本番。設計した穴のサイズにミスが見つかり、最終工程で部品がはまらないトラブルに見舞われます。それでも宮堂さんは冷静さを失いません。「ものづくりの現場では、トラブルは起こるもの。大切なのは、今すべきことを考え、それだけに集中することです」。日頃から心掛けていた姿勢を貫き、最後の1分まで部品を削る作業を繰り返しました。

「支えてくれた仲間の思いに応えたい」。その一心で完遂し、銀メダルを獲得。安堵（あんど）の思いと周囲への感謝が込み上げたといいます。

「技能五輪は、試行錯誤しながら答えを導く過程にも価値があります。次は、自分が後輩を支える立場で、金メダル獲得に貢献したいです」と話します。既に、2年後に愛知で開催される国際大会を見据えた挑戦が始まっています。



▲競技後、エキスパートの野中さんとハイタッチする宮堂選手

cover　横根藤井神社祭礼の神聖な舞「子供三番叟」。晴れ舞台を前に、奉納する我が子の足が地面に付かないよう、父親が大切に肩に担いで舞台に向かう、緊張と喜びが混ざる瞬間です。大勢のまちの人に見守られ、5人のこどもが素晴らしい舞を奉納しました。



2026.12 広報おおぶ
2026年12月1日発行　No.1269
QRコードは㈱デンソーウェーブの登録商標です。
■発行/大府市 〒474-8701 愛知県大府市中央町五丁目70
■電話/0562(47)2111
■企画・編集/企画広報戦略課
■電話/0562(45)6214
■メール/koho-obu@ma.medias.ne.jp
■FAX/0562(48)4808
■印刷/サンメッセ㈱